

# 認定看護師の役割と活動

## 第7回 『摂食・嚥下障害看護認定看護師』

医療法人徳洲会 共愛会病院

わたなべ 渡邊  
わたる 渉 様

令和3年7月掲載

摂食嚥下とは、単に飲み込みの部分（嚥下）だけではなく、食事を認識して実際に飲み込むまでの一連の動作のことを言います。その一連の動作のいずれかが上手くいかないと、食事を自分で食べることができなくなったり、食事中や食後にむせたりすることがあります。

摂食嚥下障害があると、ミキサー状の食事やソフト食と言われるような嚥下調整食を食べていることがあります。加齢によるものや、疾患によるものなどで、やむを得ず嚥下調整食を食べて頂く必要がある場合もありますが、食事をする時のケアが不十分だと、食べるための能力があっても、嚥下調整食が必要となってしまう場合もあります。

その人の食事に関する能力が十分に発揮できるようなケアを提供するのが、摂食・嚥下障害看護認定看護師の役割です。食事に関するケアの基本として、食事中の姿勢はとても重要です。食事中の姿勢が正しく調整されていないと、食事を食べることができていても食べにくくなっ

たり、食事中に疲れやすかったり、体が傾いてしまったりしてしまいます。自分で食事ができず介助が必要だった人が、食事をするときのポジショニングを整えることで、自分で食べることができるようになる場合や、食べにくくてむせていた方がむせずに食べられるようになる場合もあります。ここが疎かになってしまうと、他の部分へのケアの効果も十分に得られないこともあります。

車椅子で食事をされている場合もあるかと思いますが、多くの車椅子の場合、食事に適した姿勢になっていないことがあります。元々、車椅子は移送のための道具であって食事を食べるための道具ではありません。車椅子の構造による問題として、車椅子にそのまま座っていると、やや後方に傾いた姿勢になっています。食事中にその姿勢になっていると、飲み込む時に力が入りにくくなったり、体を前側に傾けにくくなり食事が取りにくい、口まで食事を運びにくいという状況になってしまうことがあります。

車椅子が食事に適した姿勢になっていないのは、座面や背面のシートがたわんでいること、車椅子のフレームが後方に向けて下がっていること、足をフットサポートに乗せていることが原因です。それを改善するために、身近にあるバスタオル等を使用して、車椅子の座面や、背面の

たわみを修正し、両足をフットサポートから下ろして床に足をつけてもらいます。

ベッドで食えるときのポジショニングでは、体幹や上肢の支えによって、食べやすくなったり、食事時の体の傾きがなくなったりして、自分で食事がしやすくなります。また、ベッドを起こす時にも、足底、体幹、上肢をクッション等を使用して支えることで、起こす段階での体の傾きや、ズレ落ちも少なくなります。ベッドで自分で食事をしてもらう時には、上肢の高さを肘関節を屈曲するだけで、食べ物を口の中に入れられる高さで支えることで、食事時の姿勢が崩れずに食べ続けることができます。

姿勢による食べやすさ、食べにくさは、説明されただけでは実感しにくいのですが、実際に体験してもらうと、その差ははっきりとわかります。

食事に関するケアを広めるために、医療・介護関係者向けに『POTT（ぽっと＝PO（ポジショニングで）T（食べる喜びを）T（伝える））プロジェクト』や、『道南食事ケア研究会』として食事に関するケアの研修会を年2～3回開催していましたが、昨今の新型コロナウイルス感染症の影響により、最近では開催ができておりませんでした。POTT プ

プロジェクトのホームページ(<http://pott-program.jp>)には、ポジショニングの時のチェックリストなどが載っていますので、是非ご覧いただければと思います。

今後、また研修会を開催していけるようにしていきたいと思っています。

これからも食事に関するケアを広められるよう尽力致します。

●現在、函館市内では下記の病院に在職しています●

共愛会病院・函館五稜郭病院